

第6章

モロッコ王制の安定性におけるバイア (忠誠の誓い) 儀礼の役割

白 谷 望

はじめに

2011年初頭から中東・北アフリカ諸国を飲み込んだ「アラブの春」と呼ばれるアラブ政変の波は、北アフリカ最西端のモロッコも例外とはしなかった。チュニジアの「ジャスミン革命」や、エジプトにおけるムバーラク退陣の動きに共鳴するかたちで、モロッコでも反体制を掲げる抗議活動が頻発し、2011年2月20日には、都市によっては5万人を超えるデモが実施された。他の君主制諸国の状況と同様に、「君主制打倒」というスローガンや国家元首としての国王の存在に疑問を呈するような声はほとんど上がらなかったものの、デモ隊は、国王の政治的権限の縮小と憲法改正、首相の解任と現国会の解散、そして汚職の廃絶などを要求した。

こうした動きに、現国王ムハンマド6世 (Muhammad VI, 在位1999年～) は迅速に対応した。反政府デモが徐々に組織化され、その規模が拡大していくことを危惧した国王は、2月20日の全国各地での大規模デモ勃発からわずか3週間後に、憲法改正を実施することを発表した。そして、国王が任命した委員からなる憲法改正委員会によって作成された改正案は、7月1日の国民投票において98.5%という驚異的な支持率で承認され (*Jeune Afrique*, July 2, 2011), 正式に施行されることとなった。続いて、国民議会選挙が前倒しで

実施され、それまではさまざまな手段を通じて体制に政権奪取を阻まれてきたイスラーム主義政党「公正開発党」(Hizb al-‘Adāla wa al-Tanmiyya/Parti de la Justice et du Développement)が第一党となり、同国初のイスラーム主義政党政権が誕生した。アラブ政変以降のモロッコにおけるこうした政治改革は、他のアラブ君主制諸国と同様に、革命や未曾有の混乱を伴わずして政変の波を切り抜け、緩やかな政治改革に成功した例としてとらえられている(白谷 2014, 97)。

しかし、他のアラブ君主制諸国とは地理的に離れていることから、その歴史はまったく異なる過程を経てきた。そこで歴代国王が強調してきたのが、王権の歴史的連続性とその宗教的正統性である。モロッコが位置するアフリカ大陸の北西端は、同地域のイスラーム化以降いくつかの王朝によって統治されてきたが、現モロッコの国土の大部分は基本的には同じ王朝の統治下に組み込まれ、その統治体制が非常に脆弱なものであったとしても、国土が大きく分断された経験をもたない。16世紀には隣国アルジェリアまでがオスマン帝国領に組み入れられたが、モロッコはその支配を逃れ、また、フランス、スペインによる分割保護領となった際にも、17世紀に確立されたアラウィー朝の王家が統治する政治体制が形式的にはあるが存続した。こうした歴史は、独立後のモロッコにおいて、国民国家の枠組みや国民の忠誠心を育みやすい土壌を提供したと考えられる。

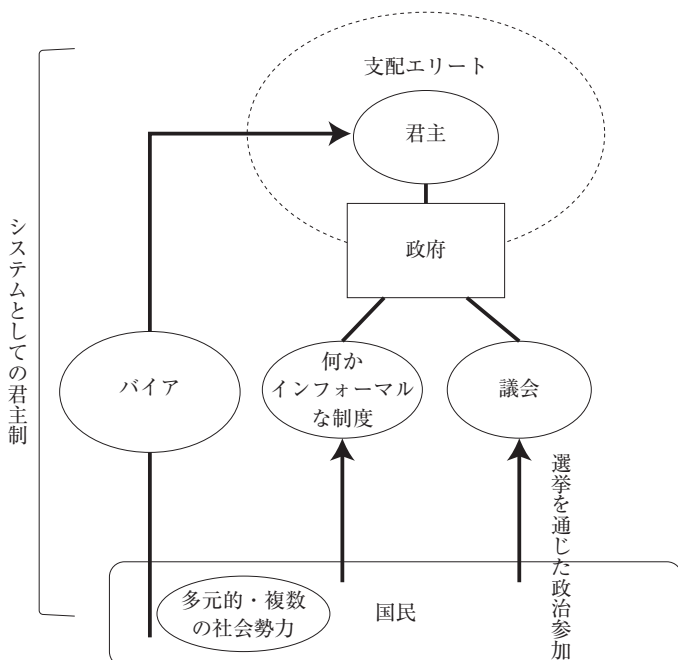
1956年の独立以降、歴代国王は、同地域を治めた歴代王朝の連続性と伝統を、さまざまな場面で繰り返し強調してきた。たとえばそれは、前国王ハサン2世(Hasan II, 在位1961~1999年)の演説で、「モロッコは、(同地域の)イスラーム化の1世紀後に当たる、預言者ムハンマドの子孫(イドリース朝始祖のイドリース1世 [Idrīs ibn ‘Abd Allāh], 在位788~793年)が即位した788年からの歴史による産物」(Rouvillois, Bouachik, and Saint-Prot 2010, 19)というように語られている。つまりモロッコは、12世紀以上続く王朝国家としての歴史を有し、その歴史は預言者ムハンマドの末裔であるシャリーフ(sharīf)⁽¹⁾による統治から開始された「正統」な系譜に連なるということが強調される

のである⁽²⁾。

他のアラブ君主制諸国とはまったく異なるこのような地理的条件と歴史的背景をふまえると、モロッコ王制の頑健性には、モロッコ独自の論理が存在していると考えられる。たとえば、湾岸産油国の政治体制の頑健性を説明するのには一定程度有用な「レンティア国家論」(Beblawi and Luciani 1987)⁽³⁾や「王朝君主制論」(Herb 1999)⁽⁴⁾は、モロッコに関していえば、それを説明できる十分な「レント」が存在せず、また支配家系による権力独占がなされていないため、他のアプローチが必要となる。他方、近年、議会や選挙の機能に注目し、モロッコ王制の安定を説明する研究も増えている(Richards and Waterbury 2013; 白谷 2014; 浜中・白谷 2015)。こうしたアプローチは、モロッコ王制の頑健性の一要因を説明するものではあるものの、そこでは国王の存在や役割が軽視されており、モロッコが「王制」として安定を維持していることを説明することが難しい。また、これらの研究は、体制の脅威となり得る諸政治アクターへの対応に焦点を当てており、アラブ政変の主役ともなった大衆が分析の射程に入っていない。アラブ政変のような政治的に不安定な時期でさえも、国民の不満の矛先が首相や政府のみに向けられ、国王がその批判の対象とならない状況を説明するためには、国民の支持という視点が不可欠となる。

本章では、歴代国王によって強調されてきた宗教的正統性と王朝国家の歴史的連続性に注目し、モロッコ王制の特徴であるバイア(bay'a, 忠誠の誓い)を国王と国民を結び付け、国民からの支持を獲得する儀礼として位置づけ、その頑健性をなす要因の一端を明らかにすることをめざす。はじめに、独立以降、議会制や政党制などの近代的制度が導入される一方で、王権の歴史的・イスラーム的正統性が強調され、それらが近代国家の枠組みに巧みに組み込まれる過程を考察する。次いで、モロッコにおいて最も重要とされる国家儀礼であり、国民の国王への忠誠が最も可視的なかたちで現れるバイアの儀礼について、同国に特徴的な「忠誠(の契約)の更新」(tajdid al-walā') (Daadaoui 2011, 83)という性格が制度化されていく過程を考察する。そして

図6-1 モロッコ王制を分析する際の視角



(出所) アジア経済研究所研究会「アラブ君主制国家の存立基盤」(2014-[C-11]) 調査研究報告書などを参考に筆者作成。

最後に、伝統儀礼であるバイアがいかにして独立後のモロッコで政治的に利用されてきたのかを分析する(図6-1)。

第1節 ネイション・ビルディングにおけるイスラーム的正統性の積極的な採用

モロッコは従来、独立直後からの複数政党制の導入や二院制の設置など、アラブ世界のなかで「最も独裁的でない独裁国家」(the least autocratic country)とみなされており、また一般的には準民主主義(semi-democracy)もし

くは自由主義的独裁（liberalized autocracy）と分類される（Brumberg 2002）。こうした理解から、上述のとおりモロッコ王制の安定を説明する際に議会や選挙に注目する研究が近年増えている。しかし一方で、上記のような近代的制度と合わせて、国家の歴史と伝統、そして国教としてのイスラームが強調されており、これらの要素が王権に正統性を付与しているのである。

1. 独立後の国家建設

1956年3月2日、モロッコの独立が公式に認められた。モロッコ初代国王のムハンマド5世（Muḥammad V, アラウィー朝第23代君主、在位1927～1961年）は、1955年11月16日に、約2年間の亡命生活を送ったマダガスカルから凱旋帰国するが、彼の帰国が当時国内で活発化していた独立運動をいっそう盛り上げることとなり、フランスとスペイン両国からの独立を勝ち取った。

独立運動のリーダーのひとりであったムハンマド5世は、もう一方の独立運動の立役者で、独立後には王制の採用に反対する諸勢力に対抗しつつ、立憲君主制を樹立する意向を示した。これを具体化するため、1960年11月3日付けのザヒール（*ṣaḥīr*, 勅令）によって、「憲法草案制定委員会」を設置した。この委員会は国王の任命する78人の委員から構成され、1962年12月31日までに憲法を制定すると予定され、国王が委員会に託した憲法の基本は、「イスラームとモロッコの伝統を尊重するという枠組みのなかでの立憲君主制」であった（私市 2001, 10-11）。

ところが、1961年2月26日、ムハンマド5世の死去とともにこの委員会は解散した。第2代国王ハサン2世は、父ムハンマド5世がとった方法を踏襲せず、スルターン個人に伝統的に認められていた広い法的権限（ザヒールの発布）を利用することによって、自ら憲法制定に取り掛かった。そして、法学者の小グループの協力を得て、自らの主導によって作成したものがモロッコ最初の憲法であり、1962年12月7日の国民投票で採択された。そこには、他のアラブ諸国に先駆けていち早く複数政党制や二院制などの近代的制度が

盛り込まれていたものの、他方では、シャリーフとしての君主制に合致したイスラームの伝統（私市 2001, 11）が巧みに取り込まれていた。

1962年憲法では、独立後の反王制勢力を意識し、国王の手にあらゆる権力が集中した国家体制の基盤づくりを行ったといえる。この憲法では、モロッコは民主社会的王制（第1条）であり、主権は国民に属し、国民は直接的には国民投票、間接的には憲法上の諸制度によって主権を行使する（第2条）と明記されている。しかし、首相を含むすべての閣僚の人事権を有するのは国王である（第24条）と明記され、国王は「アミール・アル＝ムウミニーン」（amīr al-mu'minīn, 「信徒たちの長」の意）であり（後述）、同時に「国民の最高代表者、国家統合の象徴、国家の存在と継続の守護者」とされた。また、信仰の擁護者であり、憲法尊重の守護者でもあった。さらに、国王は市民・共同体・組織の権利と自由を守る責任を有し、国家独立を守り、国土防衛を保障する者（第19条）でもあった。そして、緊急事態の際は、あらゆる状況での介入の権利が国王に保障されていた（第35条）。また、立法権は憲法上議会に属していたが、実際は国王が介入助言することがたびたびあり、議会は国王の諮問機関にすぎなかった。

その後、モロッコの憲法は時代状況に応じて何度も改正が行われてきたが、国王の地位、とりわけ宗教的に最高位の立場に関しては大きな変更は行われていない。こうした立場から、イスラーム的な活動や慣習を国王自らが積極的に奨励しているが⁽⁵⁾、一方で、宗教政党の禁止等、他の政治アクターによるイスラームの政治的利用は禁止されている。言い換えれば、イスラームの利用を独占し、宗教的な絶対的権威を有する国王に、政治的な権限も集中しているのである。

2. 王権を支えるイスラーム的正統性

西ヨーロッパ諸国による植民地支配以前、国家権力の弱体化に伴う聖者崇敬やスーフイズム⁽⁶⁾などの民間信仰の発展は、他のマグリブ地域にもみられ

たことであるが、モロッコにおいては、マラブー⁽⁷⁾崇敬とシャリーフ崇敬の結合という特徴的な潮流が生まれた（私市 2004, 53-55）。

モロッコでは歴史的に、聖者崇敬やスーフィズムが人びとの日常生活と深いかわりをもっており、また政治的・社会的な混乱が起きるたびに、人びとは不安解消と救済を求めて聖者やスーフィーに期待するようになった。この流れは、国内におびただしい数の聖者の存在を生むこととなる。そして、これらの聖者が自らの権威の差異化をはかろうとしたとき、いくら努力しても超えられない「血統による聖性」が用いられた。それが「シャリーフ」という聖なる血統であった。この一族を「清浄なる者」「尊い者」として聖別視する考えは、すでにクルアーン（第33章33, 第44章13など）のなかにもみられる。しかし、モロッコに特異な性格を与えたシャリーフ崇敬とマラブー崇敬の結合、つまりムハンマドの血統の者が聖者崇敬と結び付いて特別視されるようになったのは、同国のこの多元的な宗教勢力の存在が背景となっているのである。

このようなシャリーフという概念が政治的に利用されるようになったのは、13世紀後半に誕生したマリーン朝以降のことである。この王朝はそれまでの王朝とちがいで宗教運動を母体としておらず、説得的な支配の正統性を欠くという欠点があった。また、当時国内にはスーフィー教団を軸にした反対勢力があり、この脅威を抑える必要もあった（Waterbury 1970, 71）。これらふたつの理由から、支配の正統性獲得のための政策として、シャリーフの保護が推進された。マリーン朝の君主自身はシャリーフではなかったが、それ以降の諸王朝も巧みにシャリーフの血統を政治に利用するようになり、サアド朝以降の王朝から現在のアラウィー朝（1659年～）まで君主がシャリーフである「シャリーフ王朝」が続いている。

では、このシャリーフという血統がどのような正統性をもたらしのか。ここで重要となるのが「バラカ」（恩寵）の概念である。つまり、シャリーフは、バラカを血統によって相続していることを意味する。国王の行幸のとき、歓迎の儀式で出される乳とナツメヤシの実に、国王は指を入れるか、軽く口を

つける。国王の接触によってバラカを含んだ乳は大地に注がれ、ナツメヤシの実には蒔かれる。これは、それらが豊穡をもたらすと信じられているからである。このように、シャリーフたちが自分の権威に聖性を与え、一族の血統によって聖性を伴う権威を支配しようをしたことから、シャリーフは聖者としても崇敬されるようになり（私市 1995, 55）、この流れが現在まで引き継がれているのである。そして、こうした国王の聖なる血統とそれによって生じる宗教的権威は、君主制の在り方自体や憲法を否定し、現在も非合法の状態が続いているモロッコ最大のイスラーム主義組織「公正と慈善の集団」（Jamā'a al-'Adl wa al-Ihsān/Justice et Bienfaisance）⁽⁸⁾も認めているものである（Daadaoui 2011, 52）。

また、モロッコの国王は「アミール・アル＝ムウミニーン」という称号を名乗っている。アミール・アル＝ムウミニーンとは、歴史的にはイスラームの伝統的な主権者を意味するカリフ（ハリーファ）の称号であった。では、モロッコ国王が現在まで名目的であれアミール・アル＝ムウミニーンを名乗ることは、その権威や権力をどのように強化する働きを与えているのか。第1に、イスラームを国教とするモロッコでは、王制においてイスラームは中心に位置づけられており、イスラームの理念が体制を律することになる。そこで、アミール・アル＝ムウミニーンを名乗る国王は、イスラームの擁護の義務を負うことになるのである。そして、アミール・アル＝ムウミニーンである国王が血統上シャリーフであることは、その立場に神聖さを付与することになり、国王の政治的・宗教的な絶対的立場を揺るがないものとしている。そしてまた、国王がアミール・アル＝ムウミニーンを名乗ることにより、「バイア」の観念が生まれるのである。

第2節 バイアの儀礼

イスラームにおいてバイアとは、一般的に、個人または一団の人びとがあ

る人の権威を認め、服従の意思を示す契約行為とされ、これを通じて、支配者は自身の政治権力の正当性や権威を示す（野口 2015, 436）。その手続きは、通常大きくふたつの儀礼に分かれ、王族、廷臣、軍事指導者などの王朝の中心人物が行う「貴顕のバイア」（bay‘at al-khāṣṣa）と、一般民衆が忠誠を示す「民衆のバイア」（bay‘at al-‘amma）からなる⁹⁾。マグリブ地域では、イドリース朝（789～926年）や後ウマイヤ朝（756～1031年）からバイアが行われてきたとされている（Daadaoui 2011, 84）。歴史的には、新たに統治者が即位した時や、王朝が新たに領土を拡大した際にその土地の住民とのあいだでバイアが交わされていた。

他のアラブ君主制諸国でも新たな国王が即位した際に行われるバイアではあるが、モロッコの特徴は、それが国王即位記念日に合わせて毎年実施され、君主－国民間の「忠誠の契約の更新」としてとらえられている点である。バイアの参加者やその人数、開催地に変更が加えられることはあっても、一通りの儀礼の流れは変わっていない。本節では、モロッコのバイア儀礼の詳細を検討する。

1. モロッコにおけるバイアの歴史

現代モロッコのバイアに関する既存の研究では、その連続性、宗教性、歴史的伝統性が注目され、それが現在のモロッコ王制の支配の正統性を支えるひとつの役割を果たしていると論じられることが多い（Daadaoui 2011; Darif 1992; Hammoudi 1997; 白谷 2015）。しかし、バイア儀礼の執り行われ方の変遷やその構造を詳細に論じた研究は非常に少ない。また、マグリブ地域では8世紀頃から行われているといわれるそれとまったく同じ機能を果たしているとは考えにくい。とくに、君主－国民間の「忠誠の契約の更新」というモロッコのバイアの特徴を理解するためには、1934年まで歴史を遡る必要がある。

1934年は、モロッコ王制においてバイアが毎年行われるようになった年である。モロッコは、1912年から1956年までフランスとスペインの分割保護領

であったが、アラウィー朝の王家が統治する政治体制は形式的だが存続した。しかし、その社会は伝統的に地方の自立性が高く、地方の末端まで行き渡る行政システムが生まれにくいという特徴をもっていた。そして、都市と農村というこうした社会的な亀裂が、西ヨーロッパ諸国の介入の標的になったのである。1912年にフランス保護領下に入ったモロッコでは、王朝の権威が完全に弱体化し、地方統治者や部族長がさらに権力を増した。このような地方の自治性に目をつけ、フランス当局が採用したのが「ベルベル勅令」¹⁰⁰であった。イスラーム法の及ばないベルベル人の土地を、スルタンの支配からフランスの直轄下におき、アラブとベルベルを分断する意図をもっていたこの勅令は、モロッコにおけるナショナリズム運動の活発化の主要な要因となる。このような状況に危機感を抱いたナショナリストらが、*al-maghrib*（雑誌）や *L'action du peuple*（新聞）などを通じて、ムハンマド5世国王の即位記念日を盛大に祝う記事を掲載した。こうしたメディアを通じた運動が動員力を増していき、1934年の即位記念日から、ナショナリズムと結び付くかたちでバイアを毎年行うことになったのである。

2. バイア儀礼の構造

ではこうしたバイアが、実際どのように行われているのか。モロッコ国王のバイアの儀礼は、2日にわたって行われる国王即位記念式典の締めくくらし物として位置づけられている。つまり、前国王ハサン2世統治期には、3月3日に行われていたバイアは、1999年7月23日の前国王崩御を受けて王位を継承した現国王ムハンマド6世期から、毎年7月30日となった¹⁰¹。この2日間の記念式典は、基本的に、①招待客のレセプション（1日目昼頃）、②国王の演説（1日目夕方）、③士官学校・訓練校で表彰された新人の士官らによる宣誓表明式典（2日目午前）、④バイアの儀礼（2日目夕方）という構成になっている。こうした一連の様子は、国営テレビやラジオ、衛星放送を通じて即時放映される。

即位記念日の式典で最も重要視されているバイアだが、そのおもな参加者、言い換えれば国王と忠誠の誓いの契約を結ぶのは、全国各地の州・県の知事などの地方代表者であり、加えてイスラーム法学者や大臣、軍人、議員、公的セクターの高官が参加する。毎年4～5千人ほどが国王に忠誠を誓うために出席するが、軍人以外の参加者はモロッコの伝統的正装である白いジュッラーバ（jullāba）を着用する。彼らは王宮の広場に集まり、順番に宮殿の王に拝謁するのである。彼らは、幾重もの列をつくり、国王の到着を待つ。近年では、各国の大使や外交官も同式典に招待されている。

国王は、イスラームの伝統にのっとり、事前に準備された7頭の黒いアラブ種の馬から自身が乗る1頭を選び¹²⁾、数十人のブハーリー（サアド朝以降のスルターンの親衛隊であった黒人奴隷）の子孫らに続くかたちで姿を現す。その隣には、選ばれなかった6頭の馬が行進する。国王は、白いケープ（selham）と白いジュッラーバをまとい、3世紀続いてきたアラウィー朝のシンボルとされる緑色の大きな日傘をさしかけたブハーリーが国王の横を歩く。国王は、列をなしている国民の代表者らから順番に忠誠の誓いの言葉を受けながら、ゆっくり進んでいく。参加者は、国王がその列の前に来たら5回お辞儀をし、国王への忠誠の誓いを述べる。

3. バイアの開催地

歴史的に、バイアは権力の中央である王朝の都、もしくは反乱分子の多い土地で行われていた。他方、現在のモロッコのバイアは、首都ラバトに加え、フェス、テトワン、マラケシュ、カサブランカなどの全国各地の王宮で執り行われる。ただ、これらの都市を毎年交代で回るというわけではなく、各年の開催地は宮内省によって前日に発表されるため、国民はその開催地を直前まで知ることができない。たとえば、アラブ政変が起きた2011年のバイアは、憲法改正によって国王の権力に若干ではあるが制限がかけられた直後に迎えた国王即位記念日であり、これまでの儀式的形式を継続させるのか否かとい

表6-1 独立以降のバイア開催地一覧

国王	年	回次	開催日	開催地	出来事
ムハンマド5世	1955	28	11月18日		
	1956	29	11月18日	ラバト	独立 (3/2)
	1957	30	11月18日		称号がスルターンからマリクに
	1958	31	11月18日		
	1959	32	11月18日		
	1960	33	11月18日		
ハサン2世	1961		3月4日		ムハンマド5世死去 (2/26)
	1962	1	3月4日		憲法制定
	1963	2	3月4日	ラバト	第1回国政選挙, アフリカ統一機構加盟, Sand War (10月)
	1964	3	3月4日		
	1965	4	3月4日	マラケシュ	戒厳令 (6月), 憲法停止
	1966	5	3月4日	フェス	
	1967	6	3月4日		
	1968	7	3月4日		
	1969	8	3月4日		スペインによるイフニ譲渡
	1970	9	3月4日		憲法改正 (8月)・戒厳令解除, 第2回国政選挙
	1971	10	3月4日	フェス	クーデター未遂 (スヒラートの王宮, 7/10)
	1972	11	3月4日	ラバト	憲法改正 (2月), クーデター未遂 (パリからテトワンに戻る飛行機, 8/16)
	1973	12	3月4日	フェス	
	1974	13	3月4日	フェス	
	1975	14	3月4日	ラバト	緑の行進 (11月)
	1976	15	3月4日	フェス	サハラ・アラブ民主共和国の独立宣言 (2/27)
	1977	16	3月4日	マラケシュ	第3回国政選挙
	1978	17	3月4日	ラバト	
	1979	18	3月4日	ラバト	モリタニアが西サハラの領有権放棄
	1980	19	3月4日	ダフラ	
	1981	20	3月4日		
	1982	21	3月4日	マラケシュ	
	1983	22	3月4日	フェス	補助金の大幅削減
	1984	23	3月4日	カサブランカ	大規模暴動, アフリカ統一機構脱退 (6月), 第4回国政選挙
	1985	24	3月4日	マラケシュ	
	1986	25	3月4日	マラケシュ	

表6-1 つづき

国王	年	回次	開催日	開催地	出来事
ハサン2世 (つづき)	1987	26	3月4日	ラバト	
	1988	27	3月4日	マラケシュ	
	1989	28	3月4日	マラケシュ	アラブ・マグリブ連合条約の調印 (2/17)
	1990	29	3月4日	アガディール	
	1991	30	3月4日	ラバト	西サハラ停戦
	1992	31	3月4日	ラバト	憲法改正, 第1回地方選挙
	1993	32	3月4日	ラバト	第5回国政選挙
	1994	33	3月4日	ラバト	
	1995	34	3月4日	ラバト	
	1996	35	3月4日	ラバト	憲法改正
ムハンマド6世	1997	36	3月4日	ラバト	第6回国政選挙, 第2回地方選挙, 地方行政区改正
	1998	37	3月4日	ラバト	USFPが政権獲得
	1999		7月23日	ラバト	ハサン2世死去 (7/23)
	2000	1	7月30日	ラバト	
	2001	2	7月30日	テトワン(タンジェ)	アメリカ同時多発テロ事件
	2002	3	7月30日	テトワン(タンジェ)	第7回国政選挙
	2003	4	7月30日	ラバト	カサブランカのテロ, 第3回地方選挙
	2004	5	7月30日	テトワン(タンジェ)	家族法改正
	2005	6	7月30日	テトワン(タンジェ)	
	2006	7	7月30日	ラバト	
	2007	8	7月30日	テトワン(タンジェ)	第8回国政選挙
	2008	9	7月30日	フェス	
	2009	10	7月30日	テトワン(タンジェ)	第4回地方選挙
	2010	11	7月30日	テトワン(タンジェ)	
	2011	12	7月30日	テトワン(タンジェ)	「アラブの春」, 憲法改正, 第9回国政選挙
	2012	13	7月30日	ラバト	PJDが政権獲得
	2013	14	7月30日	ラバト	
	2014	15	7月30日	ラバト	
	2015	16	7月30日	ラバト	第5回地方選挙

(出所) モロッコの日報紙 *al-'Alam*, *al-Anbā'*, *Le Matin*, *La Vie marocaine* を参考に筆者作成。

(注) 開催地で空欄の箇所は不明。また、テトワンでバイアが行われた年は、即位記念式典1日目の催し物はタンジェで、バイアを含む2日目の催し物はテトワンで行われている。

う点で、大きな注目を集めた。当初は、即位記念日当日に大規模なデモや抗議活動が起きるのを危惧する国王が、こうしたデリケートな時期に首都を空けることはないという憶測から、ラバトでの開催がメディアによって予想されていたが、最終的には過去数年と同様に、同国北部のテトワン（タンジェ）で行われた。

独立以降のバイアの開催地を表にまとめると、時代状況に応じて開催地として選択される都市にいくつかの傾向を読み取ることができる（表6-1）。独立直後のムハンマド5世期には、首都ラバトで行われていたバイアが、第2代国王のハサン2世が即位した1961年以降、全国各地の王宮で執り行われるようになった。ハサン2世期（1961～1999年）の特徴は、①マラケシュやフェスなど、王朝国家としての歴史を象徴する都市での実施、②南部への強い関心、といえる。②に関しては、その時代に激化していた西サハラをめぐる領土問題を意識したものであろう。実際、モーリタニアが西サハラの領有権を放棄した翌1980年には、独立後モロッコで初めて西サハラのダフラ市でバイアが行われている。その後ムハンマド6世期（1999年～）に入り、開催地の傾向は大きく変化した。ムハンマド6世は、首都ラバトと2008年のフェス以外では、テトワン（タンジェ）でしかバイアを行っていない。ハサン2世の統治下では、北部はいわば見捨てられてきた地域であり、西サハラ問題を中心に、体制側の関心は常に南部に向いていた。こうした背景もあり、北部地域の住民は政治的関心が低いといわれており、同地域では選挙においても投票率が全国平均に比べて低い。前国王期から一変した北部への関心は、独立後一貫して見捨てられてきた北部を取り込む必要性を感じていることを示唆している。

第3節 バイアの機能——ムハンマド6世期を中心に——

これまでの分析を通じて、バイアの開催地は時代状況に応じて意識的に選

扱われていることが明らかになった。では、いわゆる伝統的な儀礼であるバイアは、現代のモロッコの統治体制においてどのような機能を有しているのか。ここでは、ムハンマド6世期（1999年～）を中心に、バイアの機能を考察する。

上述のとおり、ムハンマド6世が強い関心を抱いているモロッコの北部は、歴史的には「反乱・反逆の地」と呼ばれていた。モロッコのほとんどの領土がフランスの保護国であった時期、モロッコ北部の海岸沿い300キロメートルにわたって広がるリーフ山地はスペインの保護領下に組み込まれていた。そこに暮らすベルベル系の諸部族は、1921年に住民自治の主張に基づいた独自の対スペイン民族解放戦争「リーフ戦争」¹³を起し、スルターンの支配からも独立した「リーフ共和国」（1921～1926年）を樹立した。

リーフ共和国樹立の試みは短命に終わったが、この事実はモロッコの歴史に根深く刻まれていた。モロッコ独立を機に王立軍の総司令官となった当時皇太子のハサン2世は、独立直後から1959年にかけて、保護領期の北部地域住民の反体制的な立場を理由に、アルホセイマを中心としてリーフ地域で非情ともいえる弾圧を行い、多数の死者を出した。その後ハサン2世は、生涯一度も同地域に足を運ぶことはなかったといわれている。しかし、ハサン2世期の末には、西サハラ問題が一応の決着を向かえたこともあり、北部に向き合おうとする姿勢が垣間見える。たとえば、1995年に国王はザヒールを出し、モロッコ北部の府（*imāla/préfecture*）および県（*iqḷīm/province*）における社会経済的な発展促進のため、「北部地域促進・開発機構」（Agence pour la Promotion et le Développement du Nord: APDN）を設立した。これは、地域開発を目的として設立されたモロッコで初めての組織であった。

1999年に即位したムハンマド6世もこうした流れを引き継ぎ、その最初の公式訪問先として北部とオリエント（北東部）を選び、これらの地域の諸都市を数日かけて回った（*Jeune Afrique*, October 28, 2015）。その後の北部地域の発展はめざましい。とくに力が注がれたのが、交通網の整備である。モロッコ北部の地中海沿岸地域は、複雑な海岸線と南に位置する急峻なリーフ山脈

に挟まれた厳しい地理条件下にある。そこでの交通網の整備の遅れから、スペインとの距離が最短でわずか14キロという大きなメリットを生かせず、東西の端に位置するタンジェ、ウジダといった都市を除いて、北部地域は周囲から隔絶された状態が続いており、社会・経済開発の遅れがモロッコの長年の課題となっていた。新たな国王の指示でまず初めに着手されたのが、地中海沿いのタンジェからサイディアの東西507キロメートルを結ぶ「地中海道路」の建設（2012年完成）であり、続いてタウリルトとナドルを結ぶ鉄道（2009年完成）、そしてアルホセイマには国際空港が建設（2006年完成）された。また、モロッコ第3の都市であるタンジェでは、地中海地域やヨーロッパ諸国との経済的な協調関係の強化を掲げたタンジェ・地中海港（le port de Tanger MED）が2007年に開港した。国王の北部地域への積極的な訪問やこうした急速な開発は、北部の地域住民に非常に好意的に受け止められている。ムハンマド6世は、上記のようなさまざまな計画を実行し、国王－北部地域住民間の不和や無関心、恨みという過去から、新たな1ページをめくるだけでなく、北部の人びとの評価と好感を得たのである（Hormat-Allah 2005, 313）。

そして、モロッコ国民が最も重視する国家儀礼であるバイアの開催地として北部地域が選ばれるということは、先代の国王とは異なり、現国王が北部地域を好意的にとらえているという印象を地域住民に与え、さらなる国王への好感度と安心感を抱かせる。またバイアが実施されるということは、同地域住民が国王を自らの目で確認できる機会にもなる。独立以降一貫して見捨てられてきた北部の人びとにとって、国家の統治者である国王を直接見る機会はそれ以前にはなかったことであろう。加えて、全国各地の4～5千人の代表者が訪れ、国王に忠誠を誓うというバイアの構造は、同地域の住民らに対して、自分たちが国家の一部を担っているというナショナル・アイデンティティを再確認させる機能をもつ。したがって、とりわけムハンマド6世即位後のバイアは、その壮大なスケールや伝統的・宗教的なシンボルの利用を通じて統治者の威厳を示す機能だけではなく、開催地の住民に対する国王の関心や好意を意識づけることにより、彼らを体制下に組み込む役割を果たして

いるといえる。現に、アラブ政変に際しても、テトワンやアルホセイマなど北部の諸都市でデモが実施されたが、他の地域と同様に、デモ隊が要求したのは「君主制」という枠内での国王の権限縮小や議会の解散、汚職撲滅などであり、過去には「反乱・反逆の地」と呼ばれていた北部地域でも、国王の存在や君主制そのものを批判する声は上がらなかった（*Jeune Afrique*, February 21, 2011）。

終わりに

以上でみてきたとおり、モロッコではネ이션・ビルディングの過程において、王権の宗教的正統性が近代国家の枠組みに巧みに組み込まれ、それらが王制の頑健性の要因の一端となっている。その背景には、モロッコの歴史的特異性、すなわち同地域の王朝支配の連続性と、伝統的マラブー崇敬に伴うシャリーフ崇敬であり、こうした特徴は、国王に対する国民の忠誠心を育みやすい土壌を与えたといえる。

とくに、国民が国王に直接的に忠誠を示し、それが「忠誠の契約の更新」として毎年実施されるバイアの儀礼は、王朝国家としての歴史を国民間で共有し、愛国心やナショナル・アイデンティティを再確認する機能を有している。バイア儀礼の一部始終が国営メディアによって逐次放映され、国民の代表者によるものではあるものの、4～5千人ほどが参加するその儀礼の壮大さは、すべての観察者を圧倒する。儀礼のなかには、国家の歴史的・伝統的、そして宗教的シンボルが至る所に散りばめられている。つまりモロッコにおけるバイアは、その王権の歴史的・宗教的正統性が最も可視的なかたちで提示される儀礼であり、時代状況に応じて場所を変えながら毎年「契約の更新」というかたちで繰り返されることは、国民に国王への忠誠心を植え付ける機能をもつといえる。また、独立以降のバイアの開催地の変遷は、その時々王制が抱えていた政治的・社会的関心事を映し出している。第3節の

分析は、近年のバイアが、統治者の威厳を示す機能だけではなく、インフラ整備や地域の開発などと組み合わされて利用されることにより、開催地となる地域住民への関心や好意を示し、彼らを体制下に組み込む役割を果たしていることを明らかにしている。

さらに、バイアを王権強化のための重要な政治行為に利用し得ることも指摘しておきたい。その好例が、新たな国王の最初のバイアでのシャリーフ血統の再確認であり、またアラブ政変後の新憲法の施行である。2011年初頭からアラブ全域を飲み込んだアラブ政変のうねりは、現国王ムハンマド6世にとって、即位以降最も危機的な状況を生んだ。しかしながら、国王自身が主導権を握って迅速に進めた諸改革は、憲法改正案への支持というかたちで、国民による君主制への評価を示した。憲法改正では、国民の要求を反映するかたちで、首相任命権や議会解散権など国王の政治的権限には若干の制限がかけられたものの、そこには曖昧な表現が多く残り、また国王の有する宗教的な絶対的権限に関しては、ほとんど修正が加えられていない。それにもかかわらず、投票率72%、そのうち98.5%が新憲法支持であったという結果は、国王主導の改革が成功したことを示している。

そして、こうした一連の憲法改正作業の締めくくりに、バイアの儀礼が行われ、バイアの演説で国王によって新憲法の民主性と国民からの圧倒的支持が主張されたが (*Le Matin* N° 05/11, July 30, 2011), 国王の権限に関する議論はその後一気に収束した。つまりこれは、国民投票とバイアが組み合わされて実施されることにより、国王－国民の臣従関係の証明が二重に行われたことを意味する。投票という近代的・民主的制度と、バイアという宗教的・歴史的儀礼によって、国民からの王制への支持を二重に受けることにより、その正統性も二重になる。独立以降の国家建設の過程における近代的政治制度とイスラーム的要素の積極的な融合は、こうしたかたちで現在まで存続しており、アラブ政変のような国家存続を揺るがしかねない状況に際して、その頑健性が再度証明されたのである。

〔注〕

- (1) 預言者ムハンマドの直系子孫および一部の傍系親族に対する一般的尊称。この語自体は「高貴な（もの）」を意味し、10世紀以降、ムハンマドの親族に対する尊称としても使われるようになった。16世紀以降、サアド朝、アラウィー朝と、シャリーフのみが君主となってきたモロッコでは、シャリーフの血統、およびそれによってもたらされるバラカ（恩寵）が、王権の重要な要素となっている。同国における王制とシャリーフ主義に関しては、Elahmadi (2006), Waterbury (1970), Zeghal (2005), 私市 (2001; 2004)などを参照のこと。
- (2) しかし実際には、西マグリブを支配したイドリース朝以降の歴代王朝は、シャリーフが統治する王朝ではなく、再度同地域をシャリーフが治めるようになるのは、16世紀初頭に興るサアド朝以降である。
- (3) 「レンティア国家論」は、石油のような天然資源の輸出収入をおもな財源とする政府は、財政基盤をもつ必要性が小さく、天然資源の売却による富を国民に配分することで政治的不満や権利意識を眠らせ、非民主的体制を維持すると主張する。また、豊富な天然資源をもたない場合でも、産油国からの開発援助や産油国の市場に労働力を輸出し、彼らの送金というかたちで、政府はレントを得られるとし（半レンティア国家）、モロッコに関しても、海外債務が国内経済に占める割合が大きいため、これらが「レント」に当たると指摘されている（Anderson 1987, 10）。しかし浜中（2008, 36）は、原油レントを除く他のレントが、非民主体制の安定に貢献していないことを明らかにしたうえで、『「レンティア国家」概念の拡張には注意深くあらねばならない』と指摘している。
- (4) Herb は、支配家系（Dynasty）と君主制（Monarchy）が一体となり、君主の親族、すなわち支配家系が君主と一体となって統治する湾岸産油国の政治体制を「王朝君主制」（Dynastic Monarchy）と呼び、過去にアラブ世界に存在していた他の君主制と区別した。Herbによれば、君主が単独で支配を行う場合、支配体制が内部から崩れやすく、クーデターや革命が発生する危険を常に伴うが、王朝君主制は内部からは決して崩れない。支配家系内部での権力闘争が発生することがあっても、大臣職に代表される各種のポスト配分を通じてこの闘争は解消されるからである。Herbの議論では、王朝君主制には分類されない現存の君主制であるモロッコ、ヨルダン、オマーンに関して、実際にはこれらの国で支配家系が君主とともに統治することはないが、支配家系のメンバーが内閣のポストを得ることを禁止していないと説明する。そのため、万が一支配体制内部で権力闘争が起こった場合には、王族メンバーに政治的重要ポストを配分することができることから、王朝君主制を採用する湾岸諸国同様に、その政治体制は頑健であると結論づけている。しかし、モ

ロッコにおいては、独立以降、支配家系内で権力闘争が起きたことはなく、現在まで王位の長子相続の原則が守られている。また、内閣に王族メンバーが登用されるという伝統もなく、2011年に施行された新憲法では、閣僚任免を首相が中心になって行うことが明記されたことから、非常事態に際して支配家系への権力分配が行われる可能性は非常に低い。

- (5) たとえば、社会における反イスラーム的行いの根絶、宗教に関するシンポジウムや講演会の主宰、全国各地でのモスクの建設、宗教学校やクルアーン学校への寄付など (Daadaoui 2011, 52)。
- (6) イスラームにおいて内面を重視する思想・運動。神との合一（ファナー）を説く神秘主義をひとつの格とするため、「イスラーム神秘主義」と訳されることが多いが、スーフィズムとイスラーム神秘主義を一対一対応させることには、問題がある。スーフィズムは日常生活のなかでよりよく生きるための指針を示す側面も強く、必ずしも非日常性と結び付くとはいえないからである。
- (7) マグリブおよび西アフリカのムスリム聖者を指す語。アラビア語を語源として造られたフランス語による呼称。マラブーは、神からバラカを与えられており、その印として、常人には不可能な奇跡や難病治癒を行えると信じられている。
- (8) この組織の詳細については、Tozy (1999) や Zeghal (2005) などを参照のこと。
- (9) *Encyclopaedia of Islam*, BAY'Ā (by E. Tyan); *Ma'alamat al-Maghrib*, VI, bay'a (by I. Harakāt), pp. 1957-1958. 政治理論におけるバイアについては、アル＝マールディー (2006, 5-43) を参照。
- (10) フランス保護領政府による、アラブとベルベルを分断統治するための法。フランス総督の指示に基づき、スルターンの勅令というかたちで公布された。第一次勅令 (1914年9月11日) は、ベルベル人居住地にはイスラーム法でなく、ベルベル慣習法が適用されるとした。第二次勅令 (1930年5月16日) では、ベルベル慣習法をフランスの法制度のなかに編入させた。勅令は、イスラーム法の及ばないベルベル人の土地を、スルターンの支配下からフランスの直轄下におき、アラブとベルベルを分断させる意図をもっていた。
- (11) モロッコでは、国王崩御直後に行われる王位継承の際のバイアは、王朝の中心人物が行う「貴顕のバイア」であり、一般民衆が忠誠を行う「民衆のバイア」は、その翌年の即位記念日から開始される。
- (12) 前国王ハサン2世期の末期に当たる1989年から1998年までは、国王は馬ではなく、装飾が施されたオープンカーに乗ってバイアに参加した。これは、国王が高齢となり、長距離の移動を避けるためであったと考えられる。
- (13) 1921年から1926年に起きた、モロッコ北部リーフ地方の対スペイン民族解放戦争。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- アル＝マーワルディー 2006. (湯川武訳・社団法人日本イスラム協会協力) 『統治の諸規則』 慶応義塾大学出版会.
- 私市正年 1995. 「イスラームと政治体制——アルジェリアとモロッコの比較——」 『イスラームと地域紛争』 日本国際問題研究所 47-62.
- 2001. 「現代モロッコの国家体制と地方行政組織」 伊能武次・松本弘編 『現代中東の国家と地方 (1)』 日本国際問題研究所 1-28.
- 2004. 『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』 白水社.
- 白谷望 2014. 「モロッコにおける権威主義体制持続のための新たな戦略——2011年国民議会選挙と名目的な政権交代——」 『日本中東学会年報 (AJAMES)』 日本中東学会 30(1) 95-128.
- 2015. 『君主制と民主主義——モロッコの政治とイスラームの現代——』 風響社.
- 野口舞子 2015. 「ムラービト朝におけるバイアの変遷と統治の正当化」 『東洋學報』 96(4) 3月 411-436.
- 浜中新吾 2008. 「中東諸国における権威主義体制の頑健性——体制変動への経路依存性アプローチによる考察——」 『山形大学紀要 (社会科学)』 37(1) 35-51.
- 浜中新吾・白谷望 2015. 「正統性をめぐるパズル——モロッコにおける君主制と議会政治——」 『比較政治研究』 1, 12月 1-19.

<外国語文献>

- Anderson, Lisa 1987. "The State in the Middle East and North Africa," *Comparative Politics*, 20 (1) October: 1-18.
- Beblawi, Hazem, and Giacomo Luciani 1987. *The Rentier State*, London and New York: Croom Helm.
- Brumberg, Daniel 2002. "The Trap of Liberalized Autocracy," *Journal of Democracy*, 13 (4) October: 56-68.
- Daadaoui, Mohamed 2011. *Moroccan Monarchy and the Islamist Challenge: Maintaining Makhzen Power*, New York: Palgrave Macmillan.
- Ḍarīf, Muḥammad 1992. *al-Islām al-Siyāsa fī al-Maghrib* [モロッコにおける政治的イスラーム], Casablanca: Al-Majalla al-Maghribiyya li 'Ilm al-Ijtīmā' al-Siyāsī [モロッコ政治社会学雑誌出版社].

- Elahmadi, Mohsine 2006. *La monarchie et l'islam*, Casablanca: Ittissalat Salon.
- Hammoudi, Abdellah 1997. *Master and Disciple: The Cultural Foundation of Moroccan Authoritarianism*, Chicago: University of Chicago Press.
- Herb, Michael 1999. *All in the Family: Absolutism, Revolution, and Democracy in the Middle Eastern Monarchies*, Albany: State University of New York Press.
- Hormat-Allah, Moussa 2005. *Le roi: Mohammed VI ou l'espoir d'une nation*, Rabat: Dar Nachr el Maârifa.
- Richards, Alan, and John Waterbury 2013. *A Political Economy of the Middle East, Third edition*. Boulder: Westview Press.
- Rouvillois, Frédéric, Ahmed Bouachik, and Charles Saint-Prot 2010. *Vers un modèle marocain de régionalisation*, Paris: CNRS éditions.
- Tozy, Mohamed 1999. *Monarchie et islam politique au Maroc*, Paris: Presses de la Fondation nationales des sciences politiques.
- Waterbury, John 1970. *The Commander of the Faithful: the Moroccan Political Elite: A Study in Segmented Politics*, London and New York: Weidenfeld and Nicolson, Columbia University Press.
- Zeghal, Malika 2005. *Les islamistes marocains: le défi à la monarchie*. Paris: Découverte.

<新聞・雑誌>

- al-'Alam* (Casablanca)
- al-Anbā'* (Casablanca)
- Actuel* (Casablanca)
- Jeune Afrique* (<http://www.jeuneafrique.com/>)
- La Vigie marocaine* (Casablanca)
- Le Matin* (Casablanca)
- Magharebia* (<http://magharebia.com/>)
- Maghrib al-Yaum* (Casablanca)
- al-Tajdīd* (Rabat)
- Telquel* (Casablanca)